

みずほディーラーズアイ (2025年8月号)

みずほ銀行

目次

米ドル相場/ユーロ相場	2	韓国ウォン相場	8
英ポンド相場	5	台湾ドル相場	9
豪ドル相場	6	香港ドル相場	10
カナダドル相場	7	中国人民元相場	11
		シンガポールドル相場	12
		タイバーツ相場	13
		マレーシアリング相場	14
		インドネシアルピア相場	15
		フィリピンペソ相場	16
		インドルピー相場	17

* 見通しは各ディーラーのビューに基づきます。

当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。

ドル円相場

予想レンジ: USD/JPY 146.00 ~ 152.00

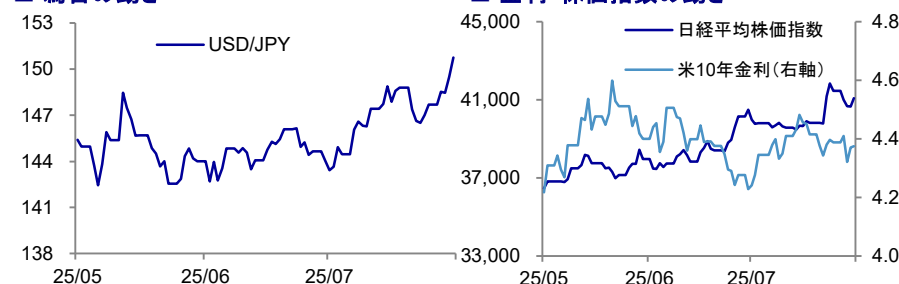
国際為替部 為替営業第一チーム 尾身 友花

■ 今月の見通し

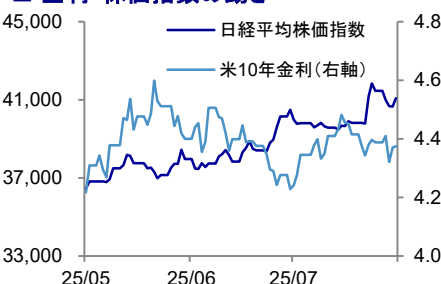
今月のドル/円相場は高値圏でもみ合いを予想する。また、高止まりの一服後は、反落にも気を付けたい。具体的には7月末に一時149円半ばに上昇したドル/円相場であるが、146～152円のレンジ推移を見込む。背景として、日米ともに金融政策加速（日本は利上げ、米国は利下げ）の素地があるにも関わらず、7月末の金融政策決定会合では政策金利の据え置きを決定した。FOMC声明では経済活動の伸びが緩やかになったことが指摘され、利下げがやや近づいている可能性も示されたが、パウエルFRB議長会見では不確実性の多さを理由に9月会合での利下げについて示唆されることはなく、利下げ観測が遠のいた。日銀の展望レポートでは25年度のコア消費者物価指数(CPI)の見通しが+2.7%に上方修正されたが、政策金利は据え置かれた。両国の金融政策維持を背景に、ドル/円は高値圏での高止まりが続くだろう。

一方で、日米ともに年内の利上げ・利下げの可能性が残存する中、経済指標や高官発言には注意したい。特に米国ではトランプ大統領からパウエル議長に対する利下げ要求が続いているが、7月会合でも金利を据え置き、且つ次回会合以降の利下げの可能性についても触れなかったことに鑑みると、今後一段と利下げ圧力が高まる事が予想され、マーケットの波乱要因になるものと想定したい。その他、7月FOMCでは7人の理事の内、ウォーラー理事とボウマン副議長が▲25bpの利下げを支持しており、その他5名の理事の今後のスタンスについても注目したい。またインフレ関連の経済指標では、12日(火)米7月CPIにて前回比上振れが予想されており、予想通りとなればドルの堅調推移が継続するが、予想外の低下となればFRBのインフレ警戒を背景とした金利据え置き判断に懐疑的な向きも増えてくるだろう。従ってドル/円は堅調推移ながらも、局面ごとに下向き圧力がかかる不安定な値動きに注意したい。

■ 為替の動き



■ 金利・株価指数の動き



■ 今月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	前回
8/1	米非農業部門雇用者数変化	7月	104K	147K
8/1	米失業率	7月	4.2%	4.1%
8/12	米CPI(前年比)	7月	2.8%	2.7%
8/15	米小売売上高(前月比)	7月	-	0.6%
8/28	米GDP(年率/前期比、改定値)	2Q	-	-
8/29	米個人支出(前月比)	7月	-	-

ユーロ相場

予想レンジ: EUR/USD 1.1300 ~ 1.1900
EUR/JPY 167.00 ~ 175.00

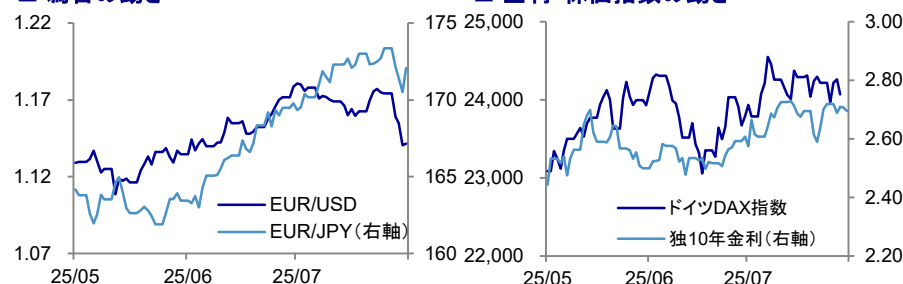
国際為替部 グローバルFIチーム 鳥場 泉水

■ 今月の見通し

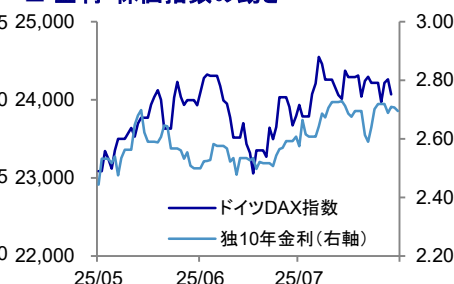
今月のユーロドル相場は底堅い展開、ユーロ/円相場はレンジ推移を予想する。本稿執筆時点では7月30日のFOMCを受けてFRBの9月利下げ観測が減退したことで、ドル買いがユーロを押し下げているが、過剰な早期利下げ期待の巻き戻しであり一時的な動きと想定。為替相場の主要テーマは、依然として「主要中央銀行の金融政策」と「トランプ関税の動向と実体経済への影響」の二点であり、相対的に買われやすいユーロは不変とみる。直近のFOMCは5会合連続金利据え置き(FF金利誘導目標: 4.25～4.50%)もボウマンFRB副議長とウォーラーFRB理事の2名反対意見となり9対2の決定、織り込み済みとは言えども利下げへの道を進む。一方のECBは、7月会合で政策金利を8会合振りに据え置き(預金ファシリティ金利: 2.00%/主要リファイナンス・オペ金利: 2.15%/限界貸付ファシリティ: 2.40%)とし、一旦膠着のステージへ移行。7月24日にラガルドECB総裁も足許は「様子見の姿勢」としており、貿易・関税に係る不確実性を意識した舵取りの中においては実体経済への影響がデータとして明確化するまで現状維持の金融政策となろう。欧米金利差縮小を意識したユーロBuy On Dipの動きに相場は底堅く推移しよう。

また、7月31日の日銀会合で政策金利(無担保コールレート: 0.5%)の維持が発表されると同時に、展望レポートでは物価上昇見通しが引き上げられた。日米関税交渉の進展により、利上げに向けた外堀が徐々に埋まりつつあることから、一時的な円買いも考えられるが、両中央銀行共に関税の影響を注視する姿勢であり、グローバル経済への影響把握に向けた経済指標のチェック段階にある。8月は次回金融政策決定会合までの材料収集期間と想定され、ユーロ/円のトレンド形成には至らずと考えたい。

■ 為替の動き



■ 金利・株価指数の動き



■ 今月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	前回
8/7	独鉱工業生産(季調済、前月比)	6月	-	1.2%
8/12	独ZEW景気期待指数	8月	-	52.7
8/14	ユーロ圏GDP(季調済、改定値、前年比)	2Q	-	1.4%
8/20	ユーロ圏消費者物価指数(HICP、確報、前年比)	7月	-	2.0%
8/22	独GDP(季調前、前年比)	2Q	-	0.0%
8/25	独IFO企業景況感指数	8月	-	88.6

カスタマーディーラーの相場観、注目点(本編の内容とは必ずしも一致しません)

■ドル/円 見通しまとめ

ブル	9名	152.00 ～ 146.00	ベア	6名	150.75 ～ 144.00
----	----	-----------------------	----	----	-----------------------

※ レンジは中心値

関	ブル	151.00 ～ 146.00	関税のインフレへの影響が見極められていく時間帯。米国利下げ期待の後退、日本のインフレ見通しが高まる中、ドル円は上下しながらも上値を試していく展開を見込む。
山崎	ブル	153.00 ～ 146.00	ドル円は上方向へ推移すると予想。FOMCとBOJを通過したことで、米関税協議において各国で進展がみられる中、米ドルの買い戻し圧力が継続するものと考ええる。
永野	ブル	153.00 ～ 145.00	関税コストの価格転嫁に慎重な企業が多く、物価への影響は限定的で米ハードデータは堅調であり、米企業決算も良好。FRBは利下げに慎重なスタンスである中、ドル買い優勢を予想。
加藤	ベア	150.00 ～ 145.00	先月はポジション調整が想定よりも大きかったとの認識。テクニカルには上抜けしておりしばらく150円方向へのトライは続くものの最終的には頭が重くなって来ると予想する。
鳥場	ベア	151.00 ～ 143.00	中央銀行による政策スタンスを考えれば、日米金利差縮小トレンド。加えてトランプ関税の今後や実体経済への影響を考慮すると不透明感払拭はまだまだ先であり、上値追いは禁物。
山口	ベア	150.00 ～ 144.00	7月のドル円は143円から149円と大きく上昇した。今年に入って大きく下落していたドルインデックスの反発によるものだ。しかし、7月のFOMCでも9月利下げの可能性が否定されていない中、ドル円は上値重い展開とみる。
山口(朋)	ベア	151.00 ～ 145.00	7月の開催された日米金融政策決定会合では大きな変化はなく、各会合毎にデータを見て各国判断する方針を再確認。関税交渉を概ね終了した米国の経済動向で大きく振られる展開継続を予想。
松永	ブル	151.50 ～ 144.50	米国との関税交渉は各国進展も、経済への影響を確認するまで日米中銀が今後の金融政策の方向性を明示するには至るまい。ドル高トレンド継続を予想する。
上遠野	ベア	150.50 ～ 144.00	8月以降の本格的な新関税の影響により米国のスタグフレーションが再び意識されることで、ドルは不安定な展開を想定。ドル一強への振り返きにはまだ距離があり、夏枯れの中で7月下旬にかけてのドル買いに対する調整をみておきたい。
小林	ベア	150.50 ～ 143.00	日米間における相互関税が妥結し、日本における追加利上げのタイミングに焦点が集まる。一方で、米国においては、トランプ大統領がFRBに対して追加利下げ圧力を強めており、8月は流動性乏しい中、下方向に調整が入ると予想。
大熊	ブル	151.00 ～ 145.00	日銀は利上げの方針は堅持しているものの、米関税の不確実性や石破政権の先行き不透明感は円の圧迫要因。トランプ関税発動後も比較的良好な米景気を背景に、ドル/円は底堅さを維持すると予想。
伊藤	ブル	154.50 ～ 145.00	日銀による追加利上げ動向は気になるところだが、米国の関税交渉が現実的な内容で合意していることを踏まえれば、ここまでのドル売りが巻き戻される可能性が高そう。ドル独歩高の夏になろう。
鈴木	ブル	153.00 ～ 147.00	関税の影響を受けてもなお米国内は力強い経済状況を示す中、日米の中銀はともに慎重姿勢を崩していない。夏枯れ相場が想定されるも、残存する金利差を背景に、ドル円は水準を上げる展開を予想する。
西	ブル	153.00 ～ 147.00	日銀による利上げは慎重スタンス変わらず期待し辛い。米国の関税交渉も比較的順調かつ当初想定ほどの米経済腰折れがないとすれば、ドルショート巻き戻しによってドル円は底堅い時間帯が続くか。
松木	ブル	152.00 ～ 146.00	現在の米国の景気状況、米企業決算を鑑みれば7月FOMCにて示されたように利下げを急ぐ材料は見当たらず。日銀も本邦政治動向が不透明な中では明確な姿勢を打ち出せず。夏枯れ相場の中、断続的な円売りが続きやすいだろう。

カスタマーディーラーの相場観、注目点(本編の内容とは必ずしも一致しません)

■ ユーロ/ドル 見通しまとめ 見通しまとめ

ブル	6名	1.1750 ～ 1.1300	ベア	9名	1.1650 ～ 1.1100
----	----	-----------------------	----	----	-----------------------

※ レンジは中心値

関	ベア	1.1500 ～ 1.1100	ECBはインフレ目標達成が指摘され、年内金利据え置きが基本シナリオ。本年3月頃からのユーロ上昇は一般し、押し目を買うより、総じてユーロに対して弱気の見方が広がっている印象で、一段の下値を試す展開か。
山崎	ベア	1.1600 ～ 1.1300	ユーロ/ドルは、レンジ推移ながらやや下方向を予想。金融政策の違いや、米関税協議の進展から、やや米ドルが買われる展開の中で下方向へ推移するものと考える。
永野	ベア	1.1700 ～ 1.1150	ドル買い優勢を予想するものの、関税に関する各国の米合意内容の詳細は不透明な部分が多く、ドル一強ではなく、ドルから欧州への資金シフトは継続し、ユーロは下支えされると想定
加藤	ブル	1.1700 ～ 1.1300	想定通りの大きなポジション調整であった。テクニカルにはもう少し下値をトライしようであるが、今月はこれをフォローするポジション調整が続くのは難しいであろう。
鳥場	ブル	1.1900 ～ 1.1300	7月ECBは政策金利据え置き、ラガルドECB総裁の「様子見姿勢」を踏まえれば、消去法的なユーロ買いは継続。ユーロ圏内の経済指標も安定しており、底堅い展開を予想したい。
山口	ブル	1.1800 ～ 1.1350	貿易戦争妥結の見込みからドルが買い戻され、その受け皿としてユーロが下落しているが、7月のFOMCでも9月利下げの可能性が否定されていない中、ドル売り/他通貨買いが出やすいと見ており、ユーロドルは堅調な展開を展望する。
山口(朋)	ブル	1.1700 ～ 1.1300	米国は利下げのタイミングを探る中、ECBについては一時的な政策金利据え置きを発表。4月以降買われたユーロへの調整も相応に入っているため、米利下げが意識されるタイミングではユーロには買い戻しもあろう。
松永	ベア	1.1850 ～ 1.1350	関税交渉が進展し、今後は関税影響も含めた欧米の経済環境に注目が移ろう。欧州企業の業績や景況感の悪化等がみられる場合、ユーロが大きく売り戻されるリスクには警戒。
上遠野	ブル	1.1650 ～ 1.1350	関税合意は7月までのユーロ買いに対する調整タイミングとしては丁度良かったが、関税影響が本格化する米国先行きへの不透明感是不変であり、ドル買い戻しの持続性には懐疑的、底堅さをみた後反転上昇を想定。
小林	ブル	1.1800 ～ 1.1300	欧米間における相互関税の内容へのネガティブな反応でいったんはユーロ売り相場となったものの、トランプ米大統領がFRBへの利下げ圧力を強めており、米金利が低下に転じた際は再びユーロが強含む展開を予想。
大熊	ベア	1.1600 ～ 1.1200	米関税発動前の駆け込み輸出の効果が剥落しGDPが減速する状況下、EUが受け入れた15%の米関税が及ぼす欧州経済への懸念が重しとなっている。先月までのユーロ急騰は一服、上値重い展開を予想。
伊藤	ベア	1.1650 ～ 1.1000	春先から続いたドル売りが本格的に反転する兆しを見せているなかで、Fedは利下げを急がない姿勢。徐々に上値を切り下げる展開を想定
鈴木	ベア	1.1700 ～ 1.1100	米国と合意した関税の影響が不透明であり、しばらく続いていたユーロ買いの調整局面が優勢か。米国の経済状況、Fedの慎重姿勢も上値を押さえる要因になると思われる。
西	ベア	1.1600 ～ 1.1100	足許の地合い継続で、ドル買いが重しとなる展開を想定。関税交渉が概ねまとまる中でドルショートが巻き戻され続けるか。データ見極めつつジャクソンホール会合での確認となるだろうが、利下げに慎重なFRBの姿勢は不変だろう。
松木	ベア	1.1650 ～ 1.1000	関税交渉の不透明感が強い中、財政拡張政による景気サポートの思惑にユーロが選好されてきたものの、欧米関税交渉妥結を巡っては米国の優位性が改めて意識されたこともあって、ドルが買い戻される展開を予想。

英ポンド相場

予想レンジ: **GBP/USD 1.3100 ~ 1.3600**
GBP/JPY 192.00 ~ 202.00

欧州資金部 天沼 幹

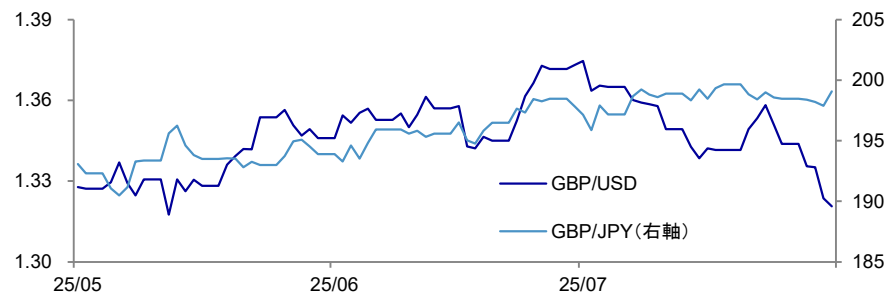
■ 先月の為替相場

先月の英ポンドは、月半ばに反発するも、全体で見ても対ドルで下落した。月初、英与党・労働党内における造反によって改革案が相次いで撤回されたことを受けてリープス財務相の辞任観測が広がり、英国債が売られながら英ポンドが大きく下落した。その後、米関税の交渉期限である9日が意識され、ドル高基調となる。14日、英リープス財務相から雇用悪化を条件に大幅利下げを視野に入れる趣旨の発言を受けポンド安が加速。16日は英6月消費者物価指数(CPI)が市場予想を上回り、利下げ期待が縮小したものの、明確なポンド買いにはつながらなかった。22日、対日米関税が15%で合意との報道流れドル安で反応。さらに23日、対EU米関税も15%で合意見通しとの報道が流れ、同じくドル安となり、ポンドもユーロに追随する形で反発した。一方でECB政策発表にて据え置きが発表された後、今後の利下げについてもタカ的なスタンスがとられたことからユーロが対ポンドで買われ、ポンドの下落圧力となった。25日、トランプ大統領がFRB議長解任に関して否定的な発言が流れドル高となる。関税周りの不透明感が払しょくされた後はFRB議長解任に関するテールリスクが意識されるようになった。28日、週末に流れた対EU米関税合意を受けてユーロ買いのアンwindとなりドル高となった。その後は30日のFOMCに向けて様子見ムードで推移した。

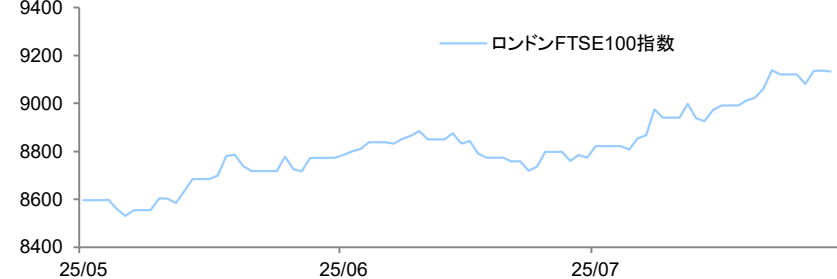
■ 今月の見通し

今月の英ポンドは軟調推移を想定する。まず7日にBOE政策発表が予定されているが、スワップ市場における▲25bpの利下げ織り込みは本稿執筆時点で約93%となっている。7月には、財務懸念が顕在化し英資産に対するリスクオフの動きも見られた。昨年決定された企業のNI国民保険料支払いの増加が結果として新規採用の抑制へとつながっており、CBIの調査においても消費者サービス分野で雇用縮小が顕著になるとの統計が発表されている。そういった環境の中で9月増税可能性まで浮上するとBOEがハト的になりやすいか。実際、英リープス財務相から雇用悪化を条件に大幅利下げを視野に入れる趣旨の発言が聞かれる。英7月雇用統計は12日発表となっており、内容によっては年後半のさらなる利下げ織り込みにつながる可能性もある。一方でインフレにおいては粘着性の高いインフレを示していたサービスで緩和の兆候が見られている。一方、モノのほうでは上昇がみられ総合で見ると上昇傾向にある。特にガス価格を先行指標と見ると、年内にピークアウトするものの直近においては引き続き強いインフレが予想される。全体でみるとインフレ懸念が残るものの、より財政や雇用悪化に鑑みた利下げ観測の拡大が意識され英ポンドは弱含むように思う。

■ 為替の動き



■ 株価指数の動き



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
7/16	CPI(前年比)	6月	3.4%	3.6%	3.4%
7/17	雇用統計(失業率)	5月	4.6%	4.7%	4.6%
7/24	PMI(総合、速報)	7月	51.8	51.0	52.0

■ 今月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想
8/7	英中銀政策金利	-	-
8/12	雇用統計(失業率)	6月	-
8/20	CPI(前年比)	7月	-

豪ドル相場

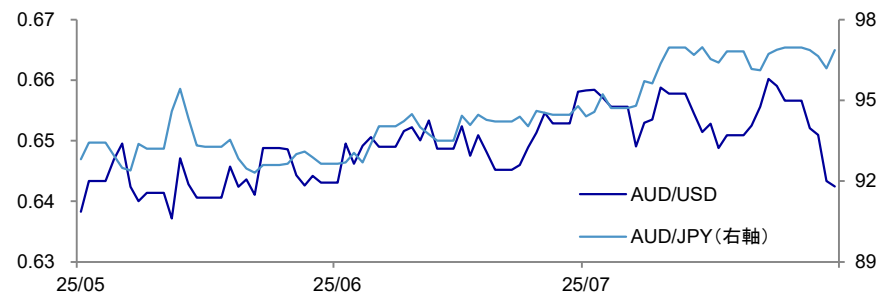
予想レンジ: AUD/USD 0.6300 ~ 0.6590
AUD/JPY 94.00 ~ 98.80

アジア・オセアニア資金部 シドニー室 安藤 愛

■ 先月の為替相場

先月の豪ドルは0.64台半ばから0.66台半ばまで振幅。初旬、米株が最高値を更新する中、豪ドルは0.65台半ばで底堅く推移。3日、米6月雇用統計の予想比良好な結果に、0.65台前半まで急落するも、米株市場が大幅に上昇するなどリスクオンとなり、元の水準まで値を戻す展開に。7日、RBAを翌日に控えて材料難の中、0.64台後半まで下落。8日、RBAは政策金利を3.85%に据え置きを決定。広く利下げが予想されていたことから、国債の利回り急上昇とともに豪ドル買いとなり一時0.6559を付けたが、欧米時間に売り戻され半値戻し。中旬、10日、FED高官によるハト派コメントを受けてドル安が強まり、0.66手前まで上昇。15～16日、良好な米経済指標の結果を受けてドルが急伸。一時0.64台を付けたのち、パウエルFRB議長解任を巡る憶測からパニック的に0.65台半ばまで反発したが0.65台前半まで売り戻された。17～18日、豪6月雇用統計において、雇用者数変化が市場予想比大幅に下振れかつ失業率が予想外に上昇したことで、次回RBA会合での利下げ観測の高まりから一時0.6455まで続落。下旬、23日、前日の日米通商合意、米欧通商合意期待を背景とした世界的な株価上昇が下支えとなり0.66台へ。24～25日、株高の流れが継続し年初来高値を0.6625まで再更新も、その後は反落。28日、米欧関税合意を受け序盤は上昇するも、今次税率による欧州経済への懸念が台頭。ユーロが対ドルで大幅下落する中、米ドルはほぼ全ての通貨に対して上昇し、0.65台前半まで値を下げた。30日、豪6月CPIがインフレ率の低下が確認されたことに加え、FOMC後のパウエルFRB議長による記者会見がタカ派的だったことを受けて0.64台半ばまで低下。

■ 為替の動き



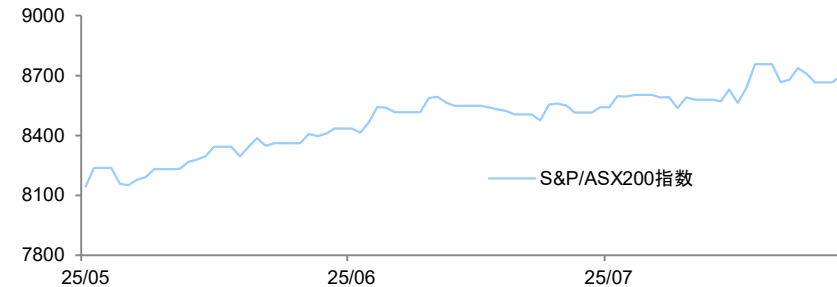
■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
7/2	小売売上高(前月比)	5月	0.5%	0.2%	-0.1%
7/3	貿易収支(A\$m)	5月	5,000	2,238	5,413
7/8	豪州準備銀行理事会	7月	3.60%	3.85%	3.85%
7/17	失業率(季調済)	6月	4.10%	4.30%	4.10%
7/17	雇用者数変化	6月	20.0	2.0	-2.5
7/30	消費者物価指数(前期比)	2Q	0.80%	0.70%	0.90%
7/30	消費者物価指数(前年比)	2Q	2.2%	2.1%	2.4%
7/30	月次CPI(前年比)	6月	2.1%	1.9%	2.1%

■ 今月の見通し

8月の豪ドルは上値重いと予想。7月30日に発表された豪4～6月期CPIは前年比2.1%(予想2.2%)、前期比0.7%(予想0.8%)と予想を下回り、8月RBA理事会での利下げ観測がさらに高まる結果となった。RBAが重視するトリム平均値は前年比2.7%と、前回値2.9%から低下し、目標とする2～3%バンドの中央値に近づいた。前回の理事会では9人いるメンバーのうち6人が金利据え置きを支持していたが、今回のCPIの結果をして「持続的に目標中央値に収束した」と判断される可能性が高まったと考える。本稿執筆時点で、8月理事会での1回(25bp)利下げ織り込みは約94%、年内約2～3回の利下げが織り込まれている。一方で7月FOMC後の記者会見におけるパウエルFRB議長のコメントがタカ派的だったことが材料視され9月会合での利下げ観測は本稿執筆時点で45%まで後退している。ドルインデックスは7月初旬をボトムに上昇トレンドを形成し始めているようにも見え、7月FOMCを受けた値動きをきっかけに、米ドル安は一旦踊り場を迎える可能性がある。かかる状況下、豪ドルは年初から形成してきた上昇チャネルを下抜けた後、方向感を探る値動きが続いている。一旦、100日移動平均線および50%フィボナッチ線に下値をサポートされているが、このレベルを下抜けると心理的節目である0.64が意識される。しばらくは上値重い値動きとなるも、8月RBA理事会で利下げが実施されれば、一旦買い戻される可能性もあると見る。

■ 株価指数の動き



■ 今月の注目イベント

発表日	豪州準備銀行理事会	期間	予想
8/7	貿易収支(A\$m)	6月	-
8/12	豪州準備銀行理事会	8月	-
8/13	賃金価格指数(前期比)	2Q	-
8/13	賃金価格指数(前年比)	2Q	-
8/14	失業率(季調済)	7月	-
8/14	雇用者数変化	7月	-
8/27	月次CPI(前年比)	7月	-
8/27	月次CPIトリム平均値(前年比)	7月	-

カナダドル相場

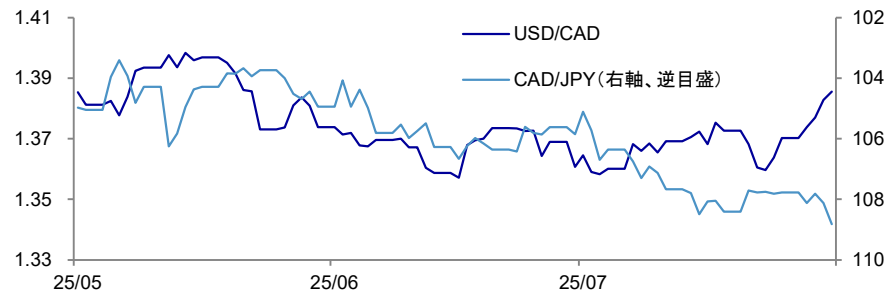
予想レンジ: USD/CAD 1.3600 ~ 1.3900
CAD/JPY 105.00 ~ 109.00

米州マーケット部カナダ室 岩田 保子

■ 先月の為替相場

米加両国の独立記念日のあった7月第1週は、米6月雇用統計が発表され、予想を上回る非農業部門雇用者数を背景に市場でのFRBによる早期利下げ観測が後退。この結果、USD/CADは一時1.3624までUSDが上昇したものの、市場では依然として年内2回の利下げ予想が維持されたことに加え、他の主要指標では雇用について軟化傾向が示されたことからUSD/CADは1.36を下抜けし、1.35台へとUSD安が進んだ。しかし、翌週7月7日からは、貿易相手国に対してトランプ大統領が関税警告書簡を送付し始め、リスク回避のUSD買いへと流れが変化した。続いて8日にはトランプ大統領が輸入する銅や同関連製品に対する50%の追加関税を近日中に公表すると発言。USD/CADは約1週間ぶりに1.37を上抜けた。7/11発表されたカナダの6月雇用統計では雇用が今年1月以来の大幅増(+8.3万人)、失業率は前月7.0%から6.9%へと改善。市場における7月30日カナダ中銀会合での利下げ確率がさらに低下し、金利据え置きがほぼコンセンサスとなったが、米国との通商協議の不透明感が重くのしかかり、CAD買いの勢いは長く続かなかった。下旬においては、米国との関税協議の期限が8/1と迫る中、日本やEUといった主要貿易相手国/地域との合意が続くにつれ、米関税政策への過度な警戒心が薄れてきたこと、また米国の民間雇用者数と第2四半期GDPの速報値がともに予想を上回ったこともあり、USD買いの勢いが増し、7/30正午現在、USD/CADは5月末以来となる1.38台前半で取引されている。

■ 為替の動き



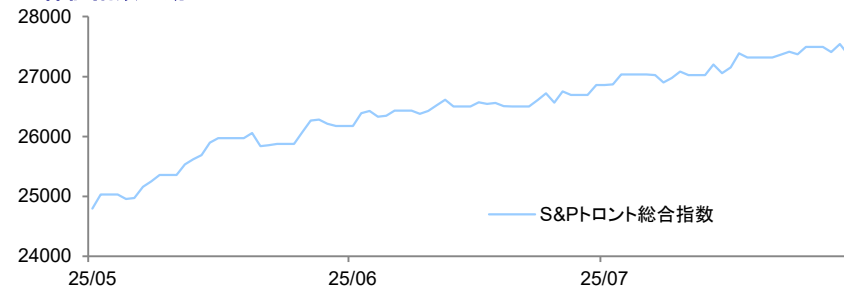
■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
7/2	S&Pグローバル・カナダ製造業PMI	6月	-	45.6	46.1
7/11	ネット雇用変化	6月	0.0k	83.1k	8.8k
7/11	失業率	6月	7.1%	6.9%	7.0%
7/15	CPI (前年比)	6月	1.90k	1.9%	1.7%
7/30	カナダ中銀金融政策決定会合		2.75%	2.75%	2.75%
7/31	GDP (前月比)	5月	-0.1%	-0.1%	-0.1%

■ 今月の見通し

7/30に行われた会合で、カナダ中銀は予想通り政策金利を3会合連続で2.75%で据え置いた。中銀はその理由として、1) 関税など米加間の通商協議についての不確実性が依然として高いこと、2) 6月雇用統計に顕著なようにカナダ経済が底堅さを示していること、3) 基調的なインフレ圧力が継続していることの3点を挙げた。そして、前月マックレム総裁が記者会見で述べた「景気の悪化がインフレにさらなる下押し圧力をかけ、貿易摩擦による物価上昇圧力が抑制されれば、政策金利の引き下げが必要になるかもしれない」との一文を正式に声明文に盛り込み、追加利下げの可能性を維持した。今月もUSD/CADは米国の関税政策に加えて、米国とカナダの経済指標の結果を背景にした両国の金融政策の行方が鍵を握ると考える。米加両国は8月1日の期限を目指して通商協議を進めているが、関税政策の不透明感が薄れない限りは、USD/CADの上値が重い状態が続くと予想。ただしリスクとしては、現在市場において年末までに2回弱と見込まれている米国の利下げ回数が、1回ないしゼロに下方修正される可能性が挙げられる。その場合、USDがCADに対して急速に上昇、一時的にでも1.39台まで買い戻されることも考えられる。

■ 株価指数の動き



■ 今月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想
8/1	S&Pグローバル・カナダ製造業PMI	7月	-
8/8	ネット雇用変化	7月	-
8/8	失業率	7月	-
8/19	CPI (前年比)	7月	-
8/22	小売売上高 (前月比)	6月	-
8/29	第2四半期GDP (年率換算、前期比)	2Q	-

韓国ウォン相場

予想レンジ: **USD/KRW 1350 ~ 1400**
KRW/JPY 10.36 ~ 11.11 (注)100韓国ウォンあたりの対円レート

東アジア資金部ソウル資金室 山内 脩平

■ 先月の為替相場

7月のドル/ウォン相場は上昇。

月初は米早期利下げ期待の高まりを受けて1,351.0ウォンでオープンし、その後1,348.5ウォンの安値をつけるも、1,350ウォンの節目がサポートラインとして意識されたほか、米関税の交渉期限である9日が意識され一服後はドル高基調で推移。月初に発表された米経済指標が概ね良好だったこともドル買いをサポートした。7日に米国から韓国への25%の関税適用が通告され、翌8日にかけて1,370ウォン台に上昇した。10日のBOK会合では2.50%の政策金利が維持された。BOKは住宅価格の高騰による家計負債の増加や米関税の影響を見極める姿勢を示し、総裁の発言内容も概ね事前予想の範囲内だったことで為替市場への影響は限定的だった。月央にかけては米政権から関税を巡り強硬な姿勢が示され、リスク回避的な動きからドル/ウォンは堅調推移。トランプ大統領からFRB議長解任が示唆されるなど、米金融政策を巡る不確実性もウォン売りに繋がり、一時1,394.5ウォンの高値をつけた。その後、月末にかけて米財務長官からFRB議長解任を否定する発言が見られ、日本・EUなど主要国との関税合意が発表されると、過度な警戒感が後退する中でドル/ウォンは下落し、1,383.1ウォンでクローズした。(30日15:30時点)

■ 今月の見通し

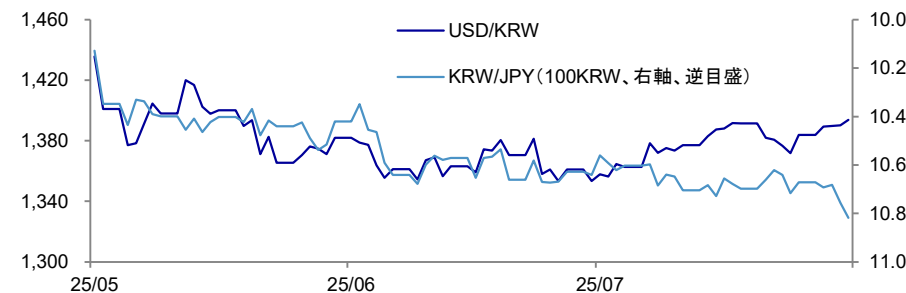
8月のドル/ウォンは軟調推移を予想。

米国との通商交渉は土壇場で合意が報じられ、相互関税率は15%に設定された。一部では、米国がドル安誘導に向けた通貨政策に関する約束を合意内容に盛り込もうとしていると報じられているものの、当局者は否定している。合意内容によるものの、短期的には為替相場にも相応の影響が出ることが想定され、注意が必要となろう。

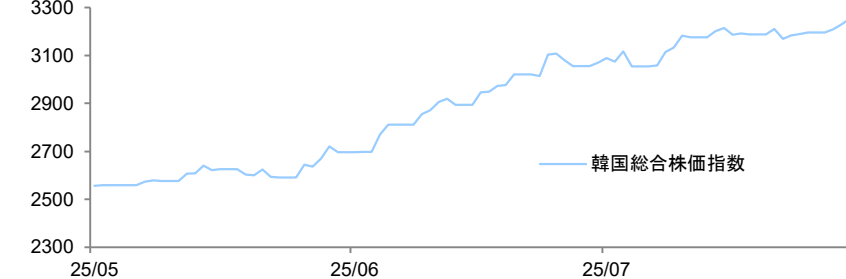
28日にはBOK会合が予定されているが、現時点では政策金利の据え置きが優勢。住宅価格の高騰と家計負債の増加対策として、政府は6月末に住宅担保融資の規制を強化。住宅販売件数が減少したとのデータが確認されるも、拙速な利下げは住宅市場の過熱を再度引き起こす可能性があり、関税影響の見極め含めBOKは様子見姿勢を維持しよう。

上記より、ドル/ウォンは米国の関税という外的要因に引き続き左右され易い値動きとなるものの、不透明感の払拭を通じてウォンに買戻しの動きが入り、若干軟調地合いでの推移を予想する。

■ 為替の動き



■ 株価指数の動き



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
7/1	貿易収支	6月	\$8400M	\$9076M	\$6938M
7/1	輸出(前年比)	6月	5.1%	4.3%	-1.3%
7/1	輸入(前年比)	6月	5.6%	3.3%	-5.3%
7/2	CPI(前年比)	6月	2.1%	2.2%	1.9%
7/10	BOK政策金利		2.50%	2.50%	2.50%
7/23	消費者心理指数	7月	-	110.8	108.7

■ 今月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想
8/1	貿易収支	7月	\$5700M
8/1	輸出(前年比)	7月	5.0%
8/1	輸入(前年比)	7月	2.0%
8/5	CPI(前年比)	7月	-
8/26	消費者心理指数	8月	-
8/28	BOK政策金利		2.50%

台湾ドル相場

予想レンジ: USD/TWD 28.90 ~ 30.40
TWD/JPY 4.65 ~ 5.25

東アジア資金部台北室 ヤン チェンロン

■ 先月の為替相場

7月のドル/台湾ドルはじり高の展開となった。

月初の7月1日は29.880でオープン後、好調なAI需要に支えられ、外資による関連株の買い戻しが加速。さらに、米FRBの利下げ観測が強まったことを受け、ドル売り優勢の展開となり、台湾ドルは一時28.80台まで急上昇。こうした急激な台湾ドル高を防ぐため、台湾中銀は外資に対し為替決済期間を短縮するなどの対策を打ち出したものの、効果は限定的。

月央になると、海外市場ではドルがやや反発したことに加え、台湾企業の配当金支払いが徐々にピークを迎えたため、外資による台湾ドル売り需要がドルの下値をサポート。しかし、高値では輸出企業のドル売りが待ち構えているため、概ね29.20-29.40を中心に推移。

月後半に入ると、期限の8月1日を前に、台湾との貿易交渉がやや難航している一方、米国は日本やEUとの間に関税合意をしたとの報道が流れ、主要通貨に対しドルの買い戻しが一段と進み、台湾ドルも緩やかに29.60価格近辺まで売られ、同レベルでクローズ。

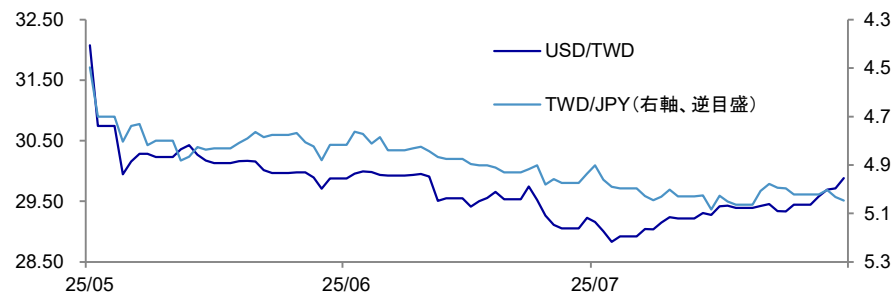
■ 今月の見通し

8月のドル/台湾ドルはレンジ相場を予想。

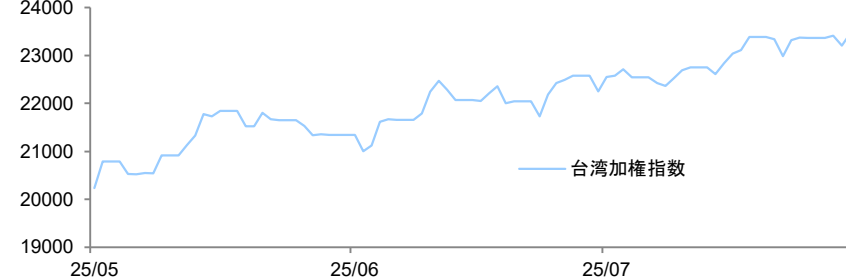
7月に入り、急激な台湾ドル高がやや一服した理由として、堅調な米国経済指標に加え、日本・EUとの関税合意も好感され、極端にドル安に振れたポジションが買い戻され格好。一方、AI関連需要に伴う台湾ドル買いはなお根強いものの、為替市場が落ち着きを取り戻しつつある中、売りが売りを呼ぶというドルの先安観が後退。

マーケットの注目材料は米国景気に移る可能性が高く、駆け込み需要の反動や関税引き上げの影響など、減速の兆しが見られた場合、米金利の低下でドルが再び売られるだろう。ただし、米国との相関性が高い台湾経済も時間差で影響を受けるため、台湾ドルの売り圧力も徐々に表れる見込み。8月以降はこうした景気動向を眺めながら、ドル台湾ドルは一進一退の動きになると予想される。

■ 為替の動き



■ 株価指数の動き



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
7/1	製造業PMI指数	6月	-	47.2	48.6
7/8	CPI(前年比)	6月	1.60%	1.37%	1.55%
7/8	輸出(前年比)	6月	27.1%	33.7%	38.6%
7/22	輸出受注(前年比)	6月	23.2%	24.6%	18.5%
7/23	鉱工業生産(前年比)	6月	22.80%	18.65%	22.60%
7/31	GDP成長率(前年比)	2Q	5.70%	7.96%	5.48%

■ 今月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想
8/1	製造業PMI指数	7月	-
8/6	CPI(前年比)	7月	-
8/8	輸出(前年比)	7月	-
8/20	輸出受注(前年比)	7月	-
8/22	失業率	7月	-
8/26	鉱工業生産(前年比)	7月	-

香港ドル相場

予想レンジ: USD/HKD 7.8000 ~ 7.8500
HKD/JPY 18.40 ~ 19.40

東アジア資金部 香港室 久本 和樹

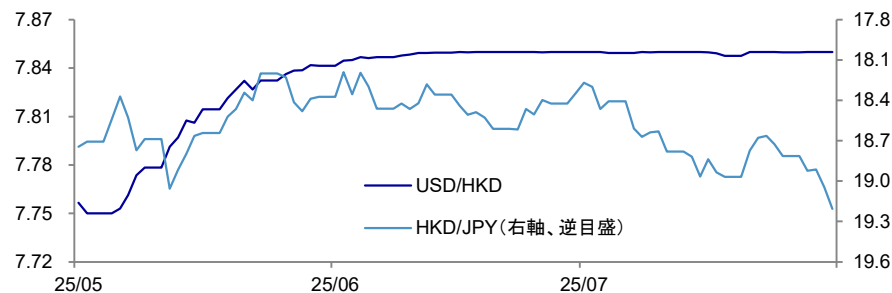
■ 先月の為替相場

7月の米ドル/香港ドル相場は、ペッグ制上限の7.85近辺での揉み合いに終始した。5月に香港金融管理局(HKMA)が香港ドル売り介入を実施して以降、香港ドル短期金利は引き続き低水準で推移しており、香港ドルと米ドルの金利差を背景とした米ドル買いのキャリートレードの流れが継続した。6月下旬に7.85に到達して以降、7月末まで一貫してペッグ制上限の7.85目前で揉み合いの推移。係る中、HKMAからは断続的に香港ドル買い/米ドル売りの為替介入が見られた。

7月初に発表された米6月雇用統計が堅調な結果となったことや、月半ばに発表された米6月CPIの結果からわずかに関税の影響が確認されたことなどを受けて米金利が上昇する中、USDHKDマーケットにおいてもUSD買い圧力が燃える展開に。USDHKDはペッグ制上限の7.85近辺での揉み合いに終始する展開となり、HKMAによる断続的な香港ドル買い/米ドル売り介入が観測された。7月の介入金額(7/29時点)は777.6億香港ドルとなり、じりじりと香港ドル流動性が吸収されている。5月から6月にかけて急速に低下した香港ドル短期金利についても7月を通じて緩やかに下げ幅を縮小。但し引き続き金利差は大きく、根強いキャリートレード需要から米ドル/香港ドルは7.85付近で高止まりの状況が続いている。

経済指標に目を向けると、香港5月小売売上高は2.4%と15か月振りの増加となり、個人消費に底打ちの兆しが確認された。しかしながら香港6月輸出(前年比)、香港6月輸入(前年比)に関しては伸び率が減速しており、米国による相互関税導入を巡る不確実性の高まりが香港経済に及ぼす影響に注目が集まる。

■ 為替の動き



■ 先月の注目イベント

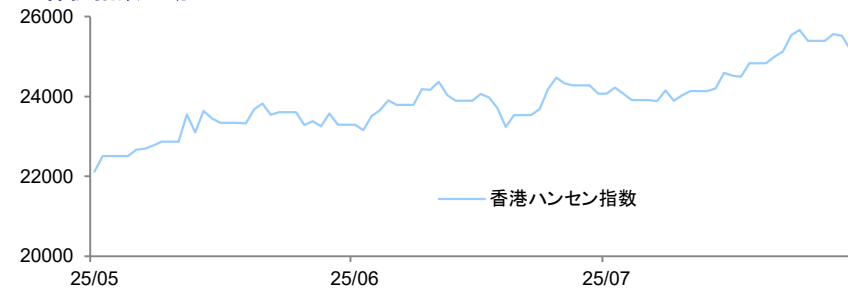
発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
7/2	小売売上高(価額、前年比)	5月	-	2.4%	-2.3%
7/4	S&P Global Hong Kong PMI	6月	-	47.8	49.0
7/7	外貨準備高	6月	-	\$431.9b	\$431.0b
7/17	失業率(季調済)	6月	-	3.5%	3.5%
7/21	CPIコンポジット(前年比)	6月	-	1.4%	1.9%
7/28	輸出(前年比)	6月	-	11.9%	15.5%
7/28	貿易収支(HKD)	2Q速報	-	11.1%	18.9%

■ 今月の見通し

8月の米ドル/香港ドル相場は、ペッグ制レンジの上半分である7.80~7.85での推移が想定される。7月については発表された米経済指標が堅調な結果となった他、6月のFOMCにおいて2026年度の利下げ見通しが引き上げられていたこと等も背景となり米金利に上昇圧力がかかる展開となった。市場においては依然として6月FOMCの予想対比積極的な米利下げを織り込んでおり、過度な米利下げ予想が剥落する場合、米金利の上昇圧力が継続し、米ドル需要を支えと考えられる。

米金利の上昇に伴いグローバルにドル買い圧力が強まる場合においては、HKMAによるペッグ制上限7.85水準での香港ドル買い介入が断続的に実施されることが想定される。その場合緩やかながらも、香港ドル金利の上昇圧力につながる事が予想される。尚、景気対策に起因する香港ドル需要は相場の押し下げ要因となる可能性があるが、米相互関税導入を巡る不確実性の高まりや、貿易量へのインパクトが懸念される場合は香港ドル売り圧力となる可能性があり、米ドル/香港ドル相場についてはペッグ制レンジの上限近辺での推移が続くであろう。

■ 株価指数の動き



■ 今月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想
8/5	S&P Global Hong Kong PMI	7月	-
8/7	外貨準備高	7月	-
8/15	GDP(前年比)	7月	-
8/19	失業率(季調済)	7月	-
8/21	CPIコンポジット(前年比)	7月	-
8/26	輸出(前年比)	7月	-
8/26	輸入(前年比)	7月	-

中国人民幣相場

予想レンジ: USD/CNY 7.1000 ~ 7.2500
CNY/JPY 19.50 ~ 21.00

中国為替資金部 西谷 鷹

■ 先月の為替相場

7月のドル人民元(USDCNY)はレンジ内で安定推移となった。

USDCNYは月初1日、7.15台半ばでオープン。3日は米6月雇用統計が市場予想・前回対比で堅調な内容となったことでドル買いが進み一時7.17台半ばまで上昇後、100Pips下落する等荒い値動きとなった。4日は7.16台半ばでクローズ。

7日、7.16台半ばでオープン。トランプ米大統領がBRICSの反米政策を強調する国に対し追加で10%の関税を課す考えを示したことを受けて7.17台前半へ上昇。8日夜間には米金利上昇を横目に7.18台前半まで続伸。11日はPBOC基準値が7.1475と昨年11月以来の元高水準に設定されたことを受けて7.16台前半まで反落。11日は7.17近辺でクローズ。

14日、7.16台前半でオープン。15日に中国第2四半期GDPを始め、中国の主要経済指標が発表されたが市場への影響は限定的。夜間時間に米6月CPI(前年比)が市場予想を上回る結果となり7.18台半ばまで上昇。18日は7.17台半ばでクローズ。

21日、7.17台半ばでオープン。23日は日米関税交渉の早期合意、第3回中米関税交渉協議開催(7/28-29)といった報道にリスクセンチメントが改善し、USDCNYは7.15台前半まで下落。24日には一時7.14台後半をつけ、25日は7.16台後半でクローズ。

28日、7.16台後半でオープン。28-29日の日程で中米通商協議が開催される中、7.17台後半まで上昇した。

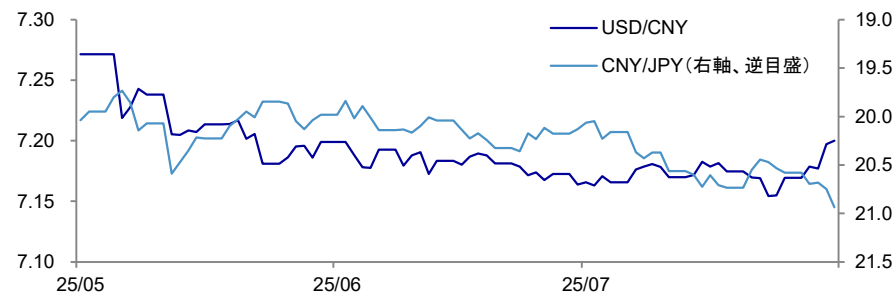
■ 今月の見通し

8月のUSDCNYは中米関税交渉リスク継続により、引き続きアップサイドリスクに警戒。

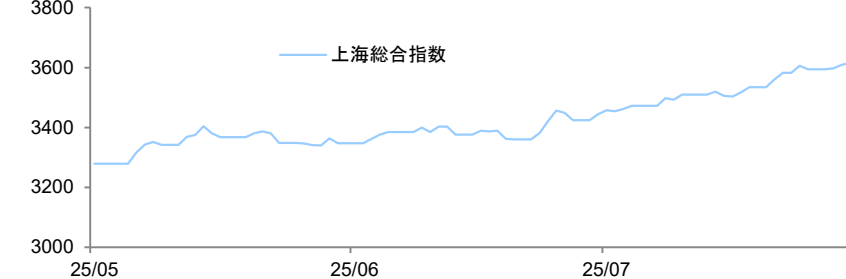
7月末時点で「追加関税一時停止措置の期限延長で合意」との報道も一部なされているが、問題を先延ばしにしたにすぎず、引き続き中米関税交渉の行方が最大のリスクである状況に変わりはない。日米・米欧が相次いで関税交渉で合意に至ったことで、市場にはやや楽観的なムードが漂うものの、中米間の緊張が高まる展開となれば、急激に元安に振れるリスクもあるため、引き続き警戒が必要だろう。なお、両国は継続して緊密に協議していく模様。

金融政策面では、米国サイドは9月FOMCで7割程度の利下げを市場参加者の間では見込んでおり、利下げ織り込みが一段と進む流れとなれば、ドル安人民元高の展開が想定される。一方、中米関税交渉の見通しが依然不透明な中、インフレリスクへの警戒からFRBが利下げに消極的な見方を示せば逆流する可能性も大いにある。中国サイドは7月に発表された中国第2四半期GDPが前年同期比+5.2%となり、上半期ベースで見ると同+5.3%と政府目標(5.0%前後)を若干上回る結果となったものの、景気刺激策に寄るところも大きいと考えられ、中国経済は依然力強さに欠く状況。かかる中、PBOCは引き続き緩和的な金融政策を継続するものとみられ、一方向に元高進行する展開は想定しづらい。7.10-7.20のレンジ内で安定的な推移を目指すものと思われる。

■ 為替の動き



■ 株価指数の動き



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
6/30	製造業PMI	6月	49.6	49.7	49.5
7/9	CPI(前年比)	6月	-0.1%	0.1%	-0.1%
7/14	貿易収支	6月	\$112.10b	\$114.77b	\$103.14b
7/15	GDP(前年比)	2Q	5.1%	5.2%	5.4%
7/15	小売売上高(前年比)	6月	5.3%	4.8%	6.4%
7/21	1年物LPR	-	3.0%	3.0%	3.0%

■ 今月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想
7/31	製造業PMI	7月	-
8/7	貿易収支	7月	-
8/9	CPI(前年比)	7月	-
8/15	小売売上高(前年比)	7月	-
8/15	鉱工業生産(前年比)	7月	-
8/15	都市部固定資産投資(年初来前年比)	-	-

シンガポールドル相場

予想レンジ: **USD/SGD 1.2800 ~ 1.3000**
SGD/JPY 113.00 ~ 117.50

アジア・オセアニア資金部 清田 歩

■ 先月の為替相場

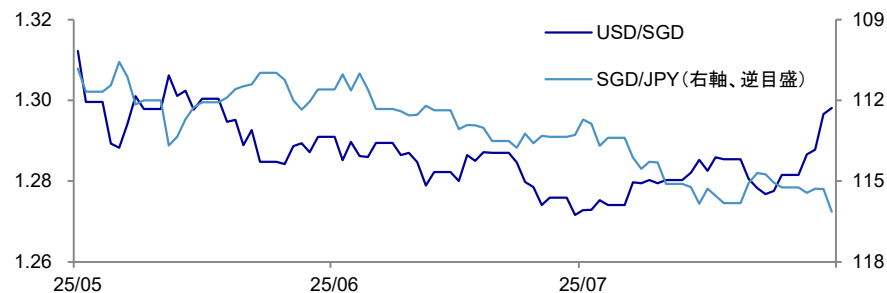
7月のUSD/SGDは月半ばにかけて上昇、月後半にかけては一時下落する局面も見られたが再び上昇に転じ、前月末対比では上昇を見せた。

月初1日のUSD/SGDは2014年以来の安値となる1.27丁度付近からスタート。第一週に発表された星6月PMI指数は景気判断の分水嶺である50丁度まで浮上、星5月リテール販売指数は事前予想対比弱含むなど強弱入り混じるが、いずれも市場への影響は限定的。3日、予想対比強含んだ米6月雇用統計発表直後のUSD/SGDは瞬時に1.27後半へ上昇するも滞空時間短く、結局1.27台半ばへ収束。

第二週はトランプ関税に関する先行き不透明感が一進一退する中、USD/SGDはじり高で推移し1.28台へ浮上。第三週14日に発表された星第2四半期GDP(速報)は事前予想比・前回比共に上回り4.3%を記録。星国経済の底堅さが確認される形となったが、USD/SGD市場への影響はほぼ見られず。15日・16日に於いては、関税の影響を受けやすい一部項目で価格上昇が見られた米6月CPI等を背景に、USD/SGDは最大1.28台後半まで上昇した。

第四週、USD/SGDは下落に転じ、24日アジア時間までに1.27台半ばへ下落。FRB高官から利下げを支持する旨の発言が出たことで、米金利がじりじりと低下したことが背景となった模様。しかし、その後は再び月末に向けてUSD/SGD上昇の展開となり、28日に報じられた米・EU間での関税合意を受けては1.29に迫る水準まで反発する動きを見せた。尚、30日に公表されたシンガポール金融管理局(MAS)による定例政策決定会合では市場予想通り「政策据置き」となった。これを受けUSD/SGDは最大20pips

■ 為替の動き



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
7/4	小売売上高 (前年比)	5月	1.8%	1.4%	0.2%
7/14	GDP (前年比)	2Q (速報)	3.6%	4.3%	4.1%
7/17	非石油輸出 (前年比)	6月	5.0%	13.0%	-3.9%
7/23	CPI (前年比)	6月	0.9%	0.8%	0.8%
7/30	MAS金融政策決定会合		現状維持	現状維持	追加緩和

■ 今月の見通し

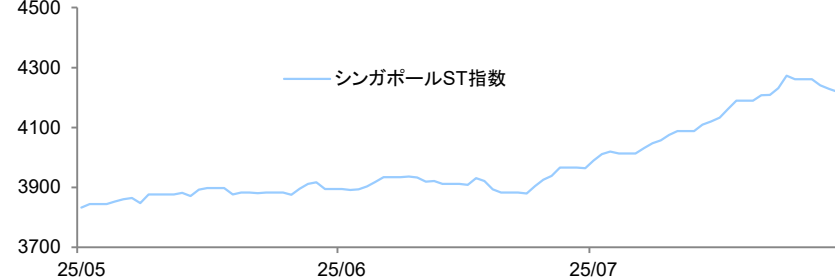
8月のUSD/SGDはやや上昇を見込む。7月のUSD/SGDは上昇し、年初来6カ月に亘り続いた下落基調*に一旦終止符が打たれる形となった。(*月末基準)

引き続きUSD/SGD見通しについて大きな変更は無く、米国における金融政策と星国における金融政策のギャップからUSD/SGDの上昇をを予想。ここもと、USD/SGD相場を押し下げてきたトランプ関税に纏わる先行き不透明感は後退しており、各種ヘッドラインに対する市場参加者の感度も低下基調にある。米CPIや米労働市場といった経済指標が堅調さを維持する限り、市場が織込む米利下げ予想はFRBドットチャートが示す回数へ収束する形で剥落していくと共に、米金利上昇に伴うUSD売り・SGD買いの巻き戻しが進行することを予想。

尚、シンガポール国内に目を向けると、MASは7/30の定例会合にて金融政策の据え置きを決定しており、トランプ関税に関する不確実性の後退や星GDP(第2四半期)の予想外の上振れなどが背景としている。また声明文では、2025年後半頃以降のインフレ再上昇について懸念を示しており、星国医療補助政策の効果や世界的な石油価格の押し下げ圧力が薄れることが主な要因として述べられた。

今後、星経済指標の底堅さが継続して確認され、またMASが懸念するようなインフレ再発の兆候が観測される場合、先々MASは更なる緩和政策に踏み込み難くなる可能性がある。その場合、USD/SGD相場に於いては下落材料として捉えられる可能性があるため、星国内経済動向については一層注視して参りたい。

■ 株価指数の動き



■ 今月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想
8/1	PMI	7月	-
8/5	小売売上高 (前年比)	6月	-
8/18	非石油輸出 (前年比)	7月	-
8/22-25	GDP (前年比)	2Q (速報)	-
8/25	CPI (前年比)	7月	-

タイバーツ相場

予想レンジ: USD/THB 32.10 ~ 33.10
THB/JPY 4.45 ~ 4.65

アジア・オセアニア資金部バンコック室 末廣 純太

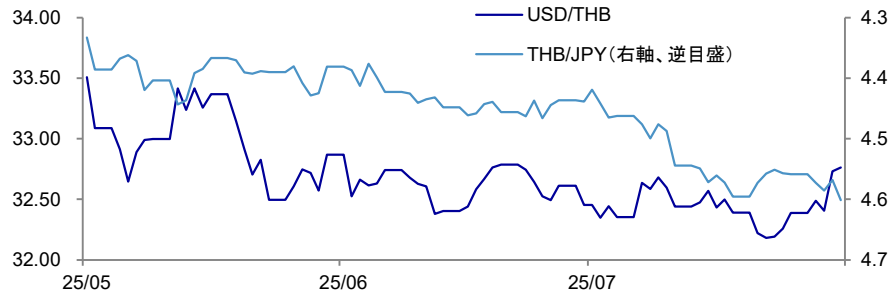
■ 先月の為替相場

月初、32バーツ半ばの水準で取引を開始すると、カンボジアとの国境紛争への対応を巡り、タイ憲法裁判所が同国首相の職務一時停止を決定したことから、ドルバーツ相場は上下する展開に。ただ、32バーツ半ばのレンジを抜けるには至らず、3日に発表された米6月雇用統計も相場への影響は限定的なものに留まり、同水準での推移が継続した。その後、7日にトランプ大統領がBRICSの反米政策に協調する国に対し10%の追加関税を課す考えを示したことでドルバーツ相場は上昇。タイ6月CPIが前年比で市場予想を下回ったことも上昇をサポートする展開となり、9日には32バーツ台後半まで上値を伸ばし、月間高値を付けた。しかしながら、中旬に入ると、米金利が低下する中で下落に転じ、32バーツ半ばまで値を戻した。16日に「トランプ大統領がパウエルFRB議長を解任する可能性」について報道され、18日にはウォラーFRB理事が利下げを主張する等、米国金融政策の先行きを巡る懸念からドルバーツは下値を拡大させ、21日には32バーツ台前半まで下落。24日には2024年9月に付けた安値を下抜ける場面も見せたものの、タイ・カンボジア国境での衝突で民間人の被害が確認される等、再び両国間の緊張が高まると、ドルバーツは上昇に転じた。28日に停戦合意との報道が確認されるも、米国とEUの通商合意が伝えられる中で32バーツ半ばまで戻し、本欄執筆時点の当地30日15時時点でも同水準での推移が続いている。

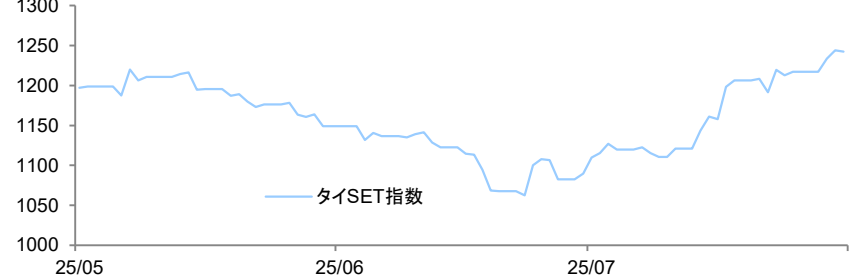
■ 今月の見通し

首相の職務が一時停止するという政治的混迷、カンボジアとの国境付近での対立激化、未だにまとまらない米国との通商交渉(7月30日時点)等といった要素がありながらも、ドルバーツ相場は上値の重い推移が続いている。寧ろ、先月は2024年9月末に付けた安値を下抜け、一時約3年半ぶりの水準を示現した。かかる中、トランプ大統領が相互関税を発表した4月初から7月29日までの対ドルでのバーツの騰落率を見てみると、約4.6%の上昇となっている。この上昇幅は他のアジア通貨や主要国通貨対比、突出して高いとは言えず、また、ドルインデックスが同期間で大幅に下落していることを勘案すれば、足もとの状況はドル安という敵失の中での下落と見てよさそうだ。一方で、足もと、”米国が日本やEUとの通商合意”との報道が確認され、関税交渉を巡る先行き不透明感も多少は晴れつつあるにも関わらず、ドルバーツが上昇の勢いを取り戻す気配は見えない。しばらくは足もとの32バーツ半ばを中心としたレンジでの推移が続くことを想定しておく必要がある。ただ、”停戦合意後も砲撃”との報道が確認される国境紛争問題、低迷する観光セクター(1-6月累計で、観光客数、観光収入ともに前年割れ)等、バーツ安をもたらす材料も相応に積みあがっている。リスクシナリオとして上方向への動きは警戒しておきたいところ。

■ 為替の動き



■ 株価指数の動き



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
7/7	CPI YoY	6月	-0.10%	-0.25%	-0.57%
7/7	CPIコアYoY	6月	1.10%	1.06%	1.09%
7/24	自動車販売台数	6月	-	50,079	52,229
7/24	輸出(通関ベース)YoY	6月	18.3%	15.5%	18.4%
7/24	輸入(通関ベース)YoY	6月	17.7%	13.1%	18.0%
7/24	貿易収支(通関ベース)	6月	\$604m	\$1,062m	\$1,116m

■ 今月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想
8/6	CPI YoY	7月	-0.50%
8/6	CPIコアYoY	7月	-
8/13	タイ中央銀行指標金利	-	-
8/18	GDP YoY	2Q	-
8/18-24	自動車販売台数	7月	-
8/18-26	輸出(通関ベース)YoY	7月	-
8/18-26	輸入(通関ベース)YoY	7月	-

マレーシアリング相場

予想レンジ: **USD/MYR 4.2200 ~ 4.3000**
MYR/JPY 34.00 ~ 35.00

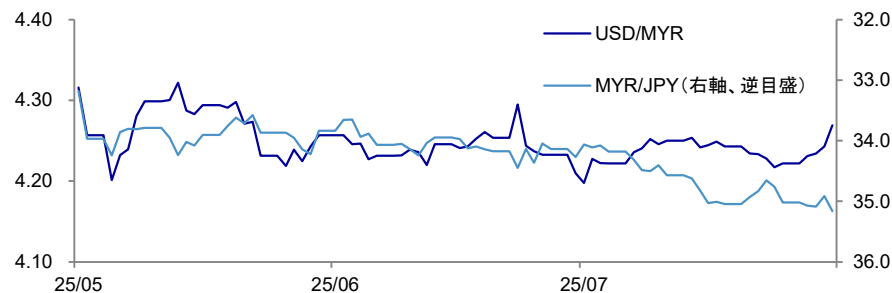
マレーシアみずほ銀行 鈴木 一勲

■ 先月の為替相場

7月は4.20台後半で取引開始。米政府高官が国債増発を否定、米金利低下と共に月初早々に月安値圏4.17台に下落したが、トランプ大統領から関税政策に関する強硬な発言があり4.22台へ反発。米6月雇用統計は予想を上回り、4日は4.23台後半を示すも、米が関税率通知の書簡を送る旨発信すると、ドルは上げ幅を縮小。翌週、BRICS反米政策の同調国に追加関税とトランプ大統領が発言、警戒感から為替は4.24台まで上昇。対馬関税率は25%のと米政府から発表されたが、8月まで交渉の猶予有り。そのため、馬中銀が9日のNPCにて5年ぶり利下げに踏み切った中、事前予想通りの結果に4.24から4.25台で小幅な動き。中旬、欧や墨に関税が発表されるが、中国2QGDP等が意外に予想を上回り、MYRは連れ高となって4.24台前半へ。米が半導体への関税を仄めかす一方、決定事項ではなく反応は限定的。米6月CPIは輸入比率が高い品目の上昇が目立ち、米物価上昇懸念がドル買い要因となるも、FRB理事が7月利下げ支持を表明。18日はリング高でスタートし、馬2QGDPと貿易統計が強弱混交となったため引けにかけて調整が入った。

下旬に入り21日は4.24台で取引開始。日本・インドネシア・フィリピンを含む複数の国が8月1日の関税交渉期限を前に米国との関税交渉合意に至ったことから、グローバルな不透明感が緩和されドル安が優勢。馬国内では23日、アンワル首相が生活費高騰を受け、馬国民への一律100MYRの現金給付やガソリン価格の引き下げ等の経済政策を公表したものの、リング相場に対する影響は限定的。結局USD/MYRはセンチメント改善のおかげで25日には4.21台まで低下した。

■ 為替の動き



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
7/1	S&P Global Malaysia PMI	Jun	-	49.3	48.8
7/9	BNM Overnight Policy Rate	-	2.75%	2.75%	3.00%
7/11	Industrial Production YoY	May	2.1%	0.3%	2.7%
7/18	Exports YoY	Jun	5.4%	-3.5%	-1.1%
7/18	Imports YoY	Jun	9.3%	1.2%	6.6%
7/18	Trade Balance MYR	Jun	10.9B	8.59B	0.76B
7/18	GDP YoY	2Q速報	4.2%	4.5%	4.4%
7/22	CPI YoY	Jun	1.2%	1.1%	1.2%

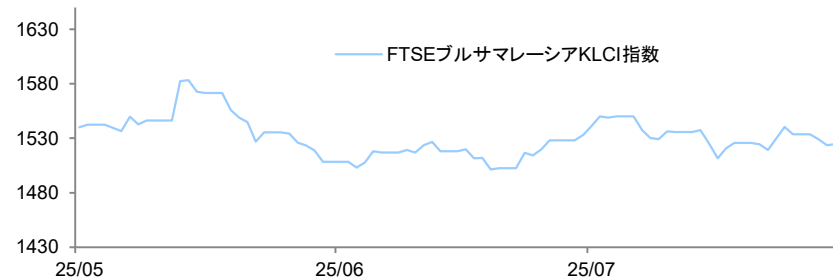
■ 今月の見通し

8月の為替相場は7月に続いて堅調な展開を予想。馬の貿易相手先上位に入る米から通知された関税率は当初水準比まさかの+1%で輸出の減速と経済成長の下方修正が懸念される。馬は米を意識して迂回輸出懸念の払拭のため、即時に対策を打ち出したが、米から外資規制等の非関税障壁について課題を出されており、事態の打開は難易度が高い。

一方、先月中旬に発表された馬2QのGDP速報値については、予想+4.1%に対し+4.5%と4月の輸出駆け込み分とGDP寄与度が高いサービス業が堅調だったことで前回から上昇した。極論で言えば、GDP貢献比率が過半数のサービス業が堅調ならばという見方があるかもしれないが、米関税政策がグローバルにセンチメントへ悪影響を与える中、米以外の輸出先や主力の電気・電子製品の輸出の減速を通じた馬全体の景況感の悪化という連鎖により、次第に馬経済が減速すると考える方が自然だと考える。加えて、第3Qの数字も確認出来ていない中では楽観的な見方は時期尚早でもあるため、数日前に馬政府が関税率は20%程度を模索するという報道がでたが、それだけでリングがしっかりと推移するシナリオは予想し難い。

7月FOMCの結果はややタカ派的であり、8月のジャクソンホール経済シンポジウムにおいてもFRBの姿勢が変わらないようであれば、この点もUSDMYR相場の支援材料となりそうだ。

■ 株価指数の動き



■ 今月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想
8/1	S&P Global Malaysia PMI	Jul	-
8/7	Industrial Production YoY	Jun	-
8/15	GDP YoY	2Q確報	-
8/19	Exports YoY	Jul	-
8/19	Imports YoY	Jul	-
8/19	Trade Balance MYR	Jul	-
8/22	CPI YoY	Jul	-

インドネシアルピア相場

予想レンジ: USD/IDR 16200 ~ 16600
IDR/JPY 0.8800 ~ 0.9200 (注)100インドネシアルピアあたりの対円レート

アジア・オセアニア資金部 穴吹 太郎

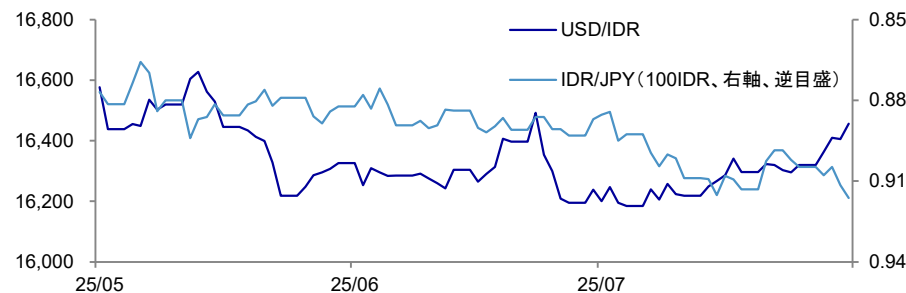
■ 先月の為替相場

先月のドルルピアは 上昇。

1日、ドルルピアは16100台後半でオープン。この日発表されたインドネシア6月のインフレ率は前年同月比で1.87%増となり、市場予想をやや上回ったものの、為替市場の反応は限定的。2日から4日にかけては米関税交渉の行方や、週末の米経済指標の発表などもあり、16100台後半から16200台前半と狭いレンジで推移した。7日から8日にかけてはトランプ米大統領が新興国グループ「BRICS」の「反米政策」に同調する国に10%の追加関税を課すと述べたことを受けリスク回避の動きが広がり、ドル買いルピア売りが優勢、16200台半ばまで上昇する場面もあったが、上昇一服後は新規材料が乏しいなか、16200台前半で横ばいの推移。

15日は米インドネシア両首脳協議を経て相互関税を19%とするという報道を受け一時ルピア高に触れる場面もあったが、16日に米政権の関税措置がインフレに影響し始めていることが示唆され、ドル高が進行したことや同日に発表されたインドネシア中銀定例会合の結果発表にて、主要政策金利の7日物リバースレポ金利を25bp引き下げ、5.25%としたことなどが相場を押し上げ16300台前半まで上昇。21日から23日にかけては日本やフィリピンが米国との貿易交渉で合意したことを受け、一時16200台後半をつけたものの、24日にはインドネシア中銀が米国との貿易協定は国内経済活動を支える商品の輸入を増やす可能性があることと報じたことで反転、16300台前半まで上昇。28日、29日は米国とEUの貿易協定を受けドル買い地合いが継続し16400台を付ける場面もあった。

■ 為替の動き



■ 先月の注目イベント

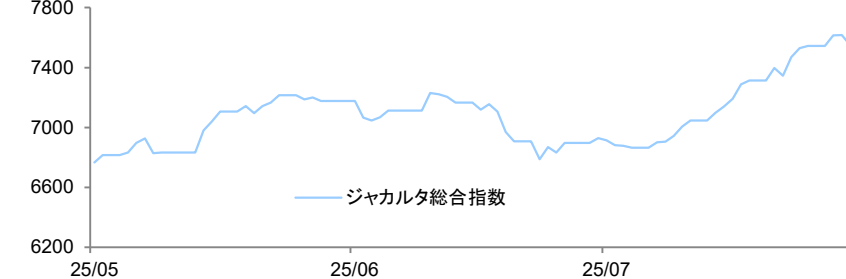
発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
7/1	CPI(前年同月比)	6月	1.80%	1.87%	1.60%
7/1	貿易収支(USD M)	5月	2,800	4,300	159
7/1	輸出(前年比)	5月	0.40%	9.68%	5.76%
7/1	輸入(前年比)	5月	0.90%	4.14%	21.84%
7/16	BI金利		5.25%	5.25%	5.50%

■ 今月の見通し

今月のドルルピアは底堅い展開を予想。

インドネシア中銀は先月15日から16日に開催された金融政策決定会合において主要政策金利の7日物リバースレポ金利を25bp引き下げ、5.25%とすることを決定した。声明文およびベリーBI総裁の会見では、2025年の成長率見通しを+4.6~5.4%に維持した一方で、インフレについては引き続き低水準であり、さらに低下する可能性についての見通しを示した。後述の関税交渉の結果も利下げを後押しし、引き続き景気を下支えする意向を示した。また15日、インドネシアは米国との関税交渉妥結を公表した。4月および7月に公表された関税率は32%に設定されていたが、19%に引き下げられた形での公表となった。一方、トランプ氏の発言に基づけば、インドネシアによる米国への関税はゼロになるとされている。関税政策の影響について中国との関係が深く、外需依存度もその他の新興国と比べ相対的に低いことから、相対的に影響は限定的とみられる。もともと、資源輸出国であり恒常的な貿易黒字を計上する環境にあるものの、貿易収支悪化の可能性については注視が必要である。ドルルピアは4月中旬に史上最安値をつけた以降、足元7月末までルピア高方向への推移となっているが、こちらは米関税の不透明感を起因としたドル安の影響が大きかったと見られている。関税の観点から見ると、今後は不透明感が和らいだことを背景にルピア安ドル高に推移することを予想する。また、先月インドネシア中銀は金利の引き下げを実施しており、景気後退懸念が出てくれば一段の金利引き下げがルピア安を牽引する可能性はあると考える。

■ 株価指数の動き



■ 今月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想
8/1	CPI(前年同月比)	7月	2.20%
8/1	貿易収支(USD M)	6月	3,550
8/1	輸出(前年比)	6月	12.20%
8/1	輸入(前年比)	6月	6.50%
8/20	BI金利		-

フィリピンペソ相場

予想レンジ: USD/PHP 56.50 ~ 58.50
JPY/PHP 0.380 ~ 0.400

アジア・オセアニア資金部 マニラ室 福田 俊輔

■ 先月の為替相場

【7月のドルペソ相場は、月初を底値にじわじわとペソ安に回帰】

7月初は、1米ドル＝56.25ペソで開始。7月上旬は、6月から続く米長期金利の低下にドルペソ相場も引っ張られ、ペソ買い優勢の流れ。月初には月のドル安ペソ高値となる56.145まで低下。しかし、その後、米金利が底打ち反転し、予想を下回る結果となった比6月物価統計などを手がかりに、ドルの買戻しが入り56ペソ台半ばまで上昇。その後、4月に発表された米関税政策の当初設定された交渉期限が迫る中、散発的に報道される各国の状況に一喜一憂し、相場の方向感を見出し辛い状況となり、56ペソ台半ばのレンジで往来する展開が続いた。

7月後半に入ってから、米関税政策の交渉期限が実質的に8月初まで延ばされた事や一部の米経済指標が良好な結果を示し始めた事で米長期金利が上昇。ドルペソ相場もドルの上値を追う展開となり、約3週間ぶりに57ペソまで上伸した。しかしながら、その後、フィリピンで1週間にわたる大雨が続き、一部で洪水被害が出るなど経済活動が停滞する中、ペソ買い需要が高まり再び56ペソ台半ば近辺まで下落。月終盤に入ってから、ドル買戻しの流れで58ペソ近辺まで上値を伸ばす展開となった。

■ 今月の見通し

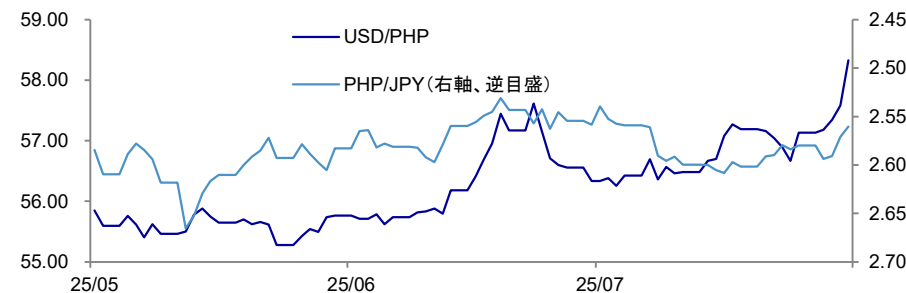
【8月は緩やかなペースでのペソ安基調がメインシナリオ】

7月は、一部米経済指標の復調や関税政策の先行き不透明感の払拭をきっかけに、ドルが買い戻される流れとなった。8月前半に集中する注目度の高い米比それぞれの経済指標（雇用、物価、GDPなど）結果により、57ペソ台半ばから58ペソ台前半のレンジで上下動を伴いながらの値動きとなるだろうが、その後は实体经济状況を確認しながらドルペソ相場の方向感が作られそうだ。

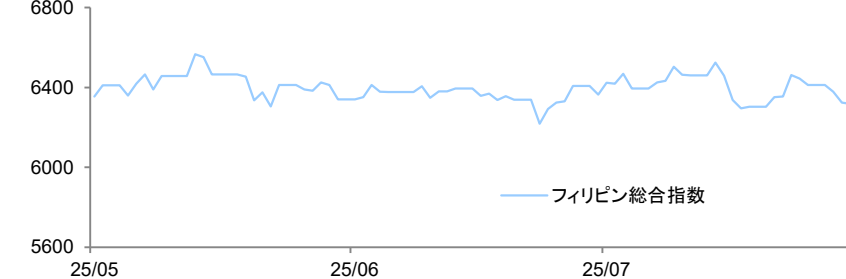
直近の比中銀からのコメントでは、今後の関税政策の影響顕在化や物価動向の予測に基づけば、2025年内に少なくとも2回の利下げを示唆している。金融政策決定会合が年内残り3回となる中、8月上旬のデータ（比CPIやGDP）次第だが、8月下旬の会合では利下げが決定される可能性が高いと考える。目先は、58ペソ前半レベルが一旦の心理的な抵抗線となりそうだが、上下にスイングしながら緩やかなペソ安基調になると予想。

リスクシナリオは、引続きトランプ米大統領の不規則発言を含めた、突発的な材料の出現に加え、思いのほか米実態経済が軟調となり、今後の米利下げ織込みが想定以上に加速するケースが考えられる。その場合は、再び56ペソ台まで戻す可能性もあるだろう。

■ 為替の動き



■ 株価指数の動き



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
7/4	CPI(前年比)	6月	1.50%	1.40%	1.30%
7/15	在外フィリピン人労働者送金額(前年比)	5月	3.60%	2.90%	4.00%
7/30	貿易収支(100万ドル)	6月	-3,400	-3,954	-3,290

■ 今月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想
8/5	CPI(前年比)	7月	-
8/7	GDP(前年比)	Q2	-
8/15	在外フィリピン人労働者送金額(前年比)	6月	-
8/28	BSP翌日物借入金利(政策金利)	-	-
8/29	貿易収支(100万ドル)	7月	-

インドルピー相場

予想レンジ: **USD/INR 85.50 ~ 88.00**
INR/JPY 1.61 ~ 1.81

アジア・オセアニア資金部 インド室 綿引 修平

■ 先月の為替相場

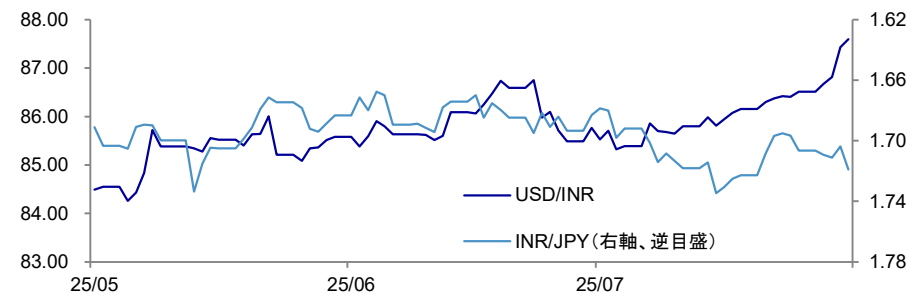
【7月の米ドル/インドルピーは、ルピー安の展開】

85台後半水準にて当月取引を開始。月初は、85台半ばを割り込むと、ポジション調整と思しき動きからルピー高の流れとなるも、実需勢のフローも相俟って、底堅く推移。月央は、節目86水準を挟んでの攻防となり、安値圏での値動きが継続したが、月末にかけては、USD買い圧力の再燃に、じりじりとルピー安に転じる展開に。一方、インド準備銀行(RBI)からの上値抑えの為替介入にて平準化されつつ過度なルピー安の動きは抑制され、結局86台後半水準にてクローズ(28日時点)。

SENSEXは、83,000台後半水準で開始後、月初は年初来高値目前の動きを見せるも、上値の重さから調整色を強める展開。月央から月末にかけては、82,000台で底堅く推移するも、利益確定売りの様相となり、81,000台を割り込んでクローズ(28日時点)。外国人投資家からのインド株への投資資金流入は、7月単月では小幅に売り越し優勢となっている。

インド経済指標では、6月製造業/サービス業PMIは前対比で良化。6月消費者物価指数(CPI、前年比)は+2.10%と、前回の+2.82%から低下。6月貿易収支は、赤字幅は縮小したものの、赤字常態化は変わらず。

■ 為替の動き



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
7/1	製造業PMI	6月	-	58.4	57.6
7/3	サービス業PMI	6月	-	60.4	58.8
7/14	CPI	6月	2.25%	2.10%	2.82%
7/15	貿易収支(百万ドル)	6月	-21,500	-18,773	-21,880
7/28	鉱工業生産	6月	2.20%	1.50%	1.90%

■ 今月の見通し

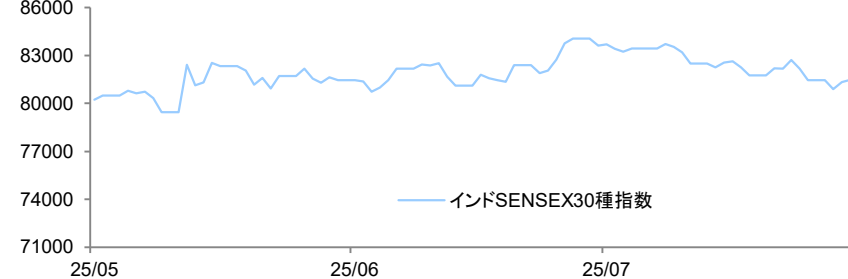
【8月の米ドル/インドルピーは、節目での上値攻防か】

8月においては、節目87水準を目前に迫る中、RBIからの為替介入での平準化にて、上値の重い展開か。トランプ米大統領の関税動向の軌道修正から、USD買い圧力の再燃を受けINR安が進展し易い状況であるが、輸出促進に向けたRBIのアンダーコントロール継続を前提に、過度なルピー安の抑制と値動きの緩和にて、攻防する展開を見込む。

RBIの金融政策を振り返れば、前回6月金融政策委員会(MPC)では、市場予想を上回る▲50bpのサプライズ利下げにて、政策金利を5.50%とした。政策スタンスは、前回の緩和的スタンスから中立スタンスに変更しており、総裁からの利下げ余地が限定されることのコメントや、直近のCPIもインフレーターゲット下限に近傍しており、8月MPCにおいては、政策金利の据え置きを予想する。

経常収支の4四半期ぶりの黒字もあり、需給面での改善で過去対比では上値の重い展開も、RBIの為替柔軟姿勢で従来対比では為替変動幅は大きく、ボラティリティは高い状況は変わっていない。一方、節目でのアンダーコントロールは引き続き継続されており、大きなダイレクション変化とまでは至らず、安値圏での推移かつ緩やかなルピー安方向で構えておきたい。

■ 株価指数の動き



■ 今月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想
8/1	製造業PMI	7月	-
8/5	サービス業PMI	7月	-
8/6	政策金利		5.50%
8/12	CPI	7月	-
8/14	貿易収支(百万ドル)	7月	-
8/28	鉱工業生産	7月	-

■ 為替市場見通し(四半期末の予想レベル)

	2025年 7～9月期	10～12月期	2026年 1～3月期	4～6月期	7～9月期
先進国					
USD/JPY	149	150	150	151	152
EUR/JPY	171	174	176	178	181
GBP/USD	1.33	1.36	1.37	1.39	1.39
AUD/USD	0.66	0.67	0.68	0.69	0.69
USD/CAD	1.37	1.36	1.35	1.35	1.34
エマージング					
USD/KRW	1380	1370	1350	1340	1330
USD/TWD	30.00	29.70	29.30	29.00	29.00
USD/HKD	7.83	7.81	7.79	7.8	7.81
USD/CNY	7.21	7.23	7.14	7.11	7.08
USD/SGD	1.29	1.31	1.30	1.29	1.28
USD/THB	32.20	33.00	32.80	32.50	32.30
USD/MYR	4.18	4.26	4.14	4.07	4.06
USD/IDR	16300	16500	16250	16000	16000
USD/PHP	55.70	56.10	55.20	54.40	54.40
USD/INR	86.20	85.80	86.30	85.20	85.50

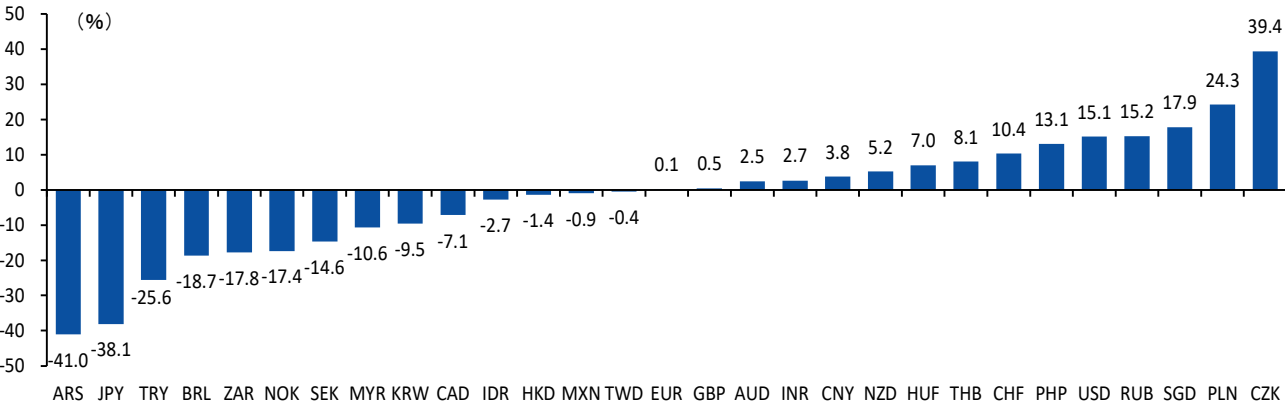
GBP/USD、AUD/USD、USD/CADを除く通貨は中期為替見通し、エマージングマーケットマンスリーに基づく見通しです。

■ 為替市場・株式市場騰落率

	為替市場	2024年末	2025年7月末	騰落率	株式市場	2024年末	2025年7月末	騰落率	USD換算
先進国									
米国	-	-	-	-	NYダウ平均	42544.22	44130.98	3.7%	-
日本	USD/JPY	157.2	150.75	-4.1%	日経平均株価	39894.54	41069.82	2.9%	7.4%
ユーロ圏	EUR/USD	1.0354	1.1415	10.2%	ドイツDAX指数	19909.14	24065.47	20.9%	20.9%
英国	GBP/USD	1.2516	1.3207	5.5%	ロンドンFTSE100指数	8173.02	9132.81	11.7%	5.9%
豪州	AUD/USD	0.6188	0.6425	3.8%	S&P/ASX200指数	8159.143	8742.844	7.2%	3.2%
カナダ	USD/CAD	1.4384	1.3856	-3.7%	S&PTロント総合指数	24727.94	27259.78	10.2%	14.4%
エマージングアジア									
中国	USD/CNY	7.2993	7.2	-1.4%	上海総合	3351.763	3573.208	6.6%	8.1%
香港	USD/HKD	7.7686	7.8498	1.0%	香港ハンセン	20059.95	24773.33	23.5%	22.2%
インド	USD/INR	85.6125	87.5975	2.3%	インドSENSEX30種	78139.01	81185.58	3.9%	1.5%
インドネシア	USD/IDR	16132	16456	2.0%	ジャカルタ総合	7079.905	7484.337	5.7%	3.6%
韓国	USD/KRW	1478.6	1393.78	-5.7%	韓国総合株価	2399.49	3245.44	35.3%	43.5%
マレーシア	USD/MYR	4.4718	4.269	-4.5%	ブルサマレーシアKLCI	1642.33	1513.25	-7.9%	-3.5%
フィリピン	USD/PHP	57.979	58.328	0.6%	フィリピン総合	6528.79	6252.73	-4.2%	-4.8%
シンガポール	USD/SGD	1.3657	1.2981	-4.9%	シンガポールST	3787.6	4173.77	10.2%	15.9%
台湾	USD/TWD	32.792	29.879	-8.9%	台湾加権	23035.1	23542.52	2.2%	12.2%
タイ	USD/THB	34.351	32.765	-4.6%	タイSET	1400.21	1242.35	-11.3%	-7.0%

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 実質実効為替レート(REER)の1994年以降の平均からの乖離(2025年6月時点)



■ 実質GDP成長率

	2023Q4	2024Q1	2024Q2	2024Q3	2024Q4	2025Q1	2025Q2	2023	2024
	(前年比%、*前期比年率%)							(前年比%)	
先進国									
米国*	3.2	1.6	3.0	3.1	2.4	-0.5	3.0	2.9	2.8
日本*	-0.4	-1.3	3.9	0.9	2.2	-0.2		1.4	0.2
ユーロ圏	0.3	0.6	0.6	1.0	1.3	1.5	1.4	0.6	0.9
英国	-0.2	0.7	1.1	1.2	1.5	1.3		0.4	1.1
豪州	1.5	1.2	0.9	0.8	1.3	1.3		2.1	1.1
カナダ*	0.7	2.2	2.6	2.4	2.1	2.2		1.5	1.6
エマージングアジア									
中国	5.3	5.3	4.7	4.6	5.4	5.4	5.2	5.4	5.0
香港	4.3	2.8	3.0	1.9	2.5	3.0	3.1	3.2	2.5
インド	9.5	8.4	6.5	5.6	6.4	7.4		7.6	9.2
インドネシア	5.0	5.1	5.1	5.0	5.0	4.9		5.1	5.0
韓国	2.2	3.4	2.2	1.4	1.1	0.0	0.5	1.4	2.2
マレーシア	2.8	4.2	5.9	5.4	4.9	4.4	4.5	3.6	5.1
フィリピン	5.5	5.9	6.5	5.2	5.3	5.4		5.5	5.7
シンガポール	3.1	3.2	3.4	5.7	5.0	4.1	4.3	1.8	4.3
台湾	4.7	6.6	4.9	4.2	3.8	5.5	8.0	1.1	4.8
タイ	1.8	1.7	2.3	3.0	3.3	3.1		2.0	2.5

(注)インドの年間成長率は会計年度(4～3月)。

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 失業率

	24/10	24/11	24/12	25/01	25/02	25/03	25/04	25/05	25/06	2023	2024
	(%)									(%)	
先進国											
米国	4.1	4.2	4.1	4.0	4.1	4.2	4.2	4.2	4.1	3.6	4.0
日本	2.5	2.5	2.5	2.5	2.4	2.5	2.5	2.5	2.5	2.6	2.5
ユーロ圏	6.2	6.2	6.3	6.3	6.3	6.4	6.2	6.2	6.2	6.6	6.4
英国	4.3	4.4	4.4	4.4	4.4	4.5	4.6	4.7		4.1	4.3
豪州	4.1	3.9	4.0	4.1	4.1	4.1	4.1	4.1	4.3	3.7	4.0
カナダ	6.6	6.9	6.7	6.6	6.6	6.7	6.9	7.0	6.9	5.4	6.4
エマージングアジア											
中国											
香港	3.1	3.1	3.1	3.1	3.2	3.2	3.4	3.5	3.5	3.0	3.0
インドネシア					4.8					5.4	4.9
韓国	2.7	2.7	3.7	2.9	2.7	2.9	2.7	2.7	2.6	2.7	2.8
マレーシア	3.2	3.2	3.1	3.1	3.1	3.1	3.0	3.0		3.4	3.3
フィリピン	3.9	3.2	3.1	4.3	3.8	3.9	4.1	3.9		4.4	3.8
シンガポール			1.9			2.0			2.1	1.9	2.0
台湾	3.4	3.4	3.4	3.4	3.4	3.4	3.3	3.3	3.3	3.5	3.4
タイ			0.9			0.9				1.0	1.0

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 消費者物価上昇率

	24/10	24/11	24/12	25/01	25/02	25/03	25/04	25/05	25/06	2023	2024
	(前年比%)									(前年比%)	
先進国											
米国	2.6	2.7	2.9	3.0	2.8	2.4	2.3	2.4	2.7	4.1	3.0
日本	2.3	2.9	3.6	4.0	3.7	3.6	3.6	3.5	3.3	3.3	2.7
ユーロ圏	2.0	2.2	2.4	2.5	2.3	2.2	2.2	1.9	2.0	5.5	2.4
英国	2.3	2.6	2.5	3.0	2.8	2.6	3.5	3.4	3.6	7.3	2.5
豪州			2.4			2.4			2.1	5.6	3.2
カナダ	2.0	1.9	1.8	1.9	2.6	2.3	1.7	1.7	1.9	3.9	2.4
エマージングアジア											
中国	0.3	0.2	0.1	0.5	-0.7	-0.1	-0.1	-0.1	0.1	0.2	0.2
香港	1.4	1.4	1.4	2.0	1.4	1.4	2.0	1.9	1.4	2.1	1.8
インド	6.2	5.5	5.2	4.3	3.6	3.3	3.2	2.8	2.1	5.7	5.0
インドネシア	1.7	1.6	1.6	0.8	-0.1	1.0	2.0	1.6	1.9	3.8	2.3
韓国	1.3	1.5	1.9	2.2	2.0	2.1	2.1	1.9	2.2	3.6	2.3
マレーシア	1.9	1.8	1.7	1.7	1.5	1.4	1.4	1.2	1.1	2.5	1.8
フィリピン	2.3	2.5	2.9	2.9	2.1	1.8	1.4	1.3	1.4	6.0	3.2
シンガポール	1.2	1.6	1.5	1.2	0.9	0.9	0.9	0.8	0.8	4.8	2.4
台湾	1.7	2.1	2.1	2.7	1.6	2.3	2.0	1.6	1.4	2.5	2.2
タイ	0.8	1.0	1.2	1.3	1.1	0.8	-0.2	-0.6	-0.3	1.3	0.4

(注)豪州は四半期データ。

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 経常収支

	2023Q3	2023Q4	2024Q1	2024Q2	2024Q3	2024Q4	2025Q1	2023	2024
	(対GDP比%)							(対GDP比%)	
先進国									
米国	-3.3	-3.3	-3.4	-3.5	-3.8	-4.0	-4.6	-3.4	-4.1
日本	3.2	3.8	4.4	4.6	4.7	4.8	4.9	3.8	4.8
ユーロ圏	1.1	1.7	2.2	2.6	2.8	2.6	2.4	1.7	2.6
英国	-2.4	-3.5	-3.1	-2.8	-2.6	-2.7	-2.9	-3.5	-2.7
豪州	-0.1	-0.3	-0.8	-1.3	-1.5	-2.0	-2.2	-0.3	-2.0
カナダ	-1.0	-0.6	-0.6	-0.5	-0.4	-0.5	-0.5	-0.6	-0.5
エマージングアジア									
中国	1.8	1.5	1.3	1.3	1.7	2.3	2.9	1.4	
香港	8.5	8.5	10.1	11.9	12.0	12.9	13.7	8.5	12.9
インド	-1.1	-0.9	-0.7	-0.7	-0.8	-0.8	-0.6	-0.9	-0.8
インドネシア	0.2	-0.2	-0.6	-0.6	-0.6	-0.6	-0.5	-0.2	-0.6
韓国	0.6	1.8	3.3	4.5	4.9	5.4	5.8	1.8	5.3
マレーシア	2.6	1.1	1.4	1.1	0.8	1.4	1.8	1.1	1.4
フィリピン	-2.7	-2.9	-2.3	-2.5	-3.1	-3.9	-4.2	-2.8	-3.8
シンガポール	17.6	17.7	17.5	17.3	17.4	17.5	17.5	17.7	17.5
台湾	12.9	14.0	15.1	14.7	14.2	14.2	14.0	14.0	14.1
タイ	0.8	1.5	1.5	2.2	2.0	2.1	3.5	1.5	2.1

(注)インドの年間経常収支は会計年度(4～3月)。

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 世界の政策金利

		現在の水準(%)	政策転換期		直近の政策動向	
			日付	水準(%)	日付	決定事項
先進国						
米国	FFレート誘導目標	4.25-4.50	緩和: 2024/9/18	5.25-5.50	2025/7/30	現状維持
日本	当座預金残高の政策金利	0.50	引き締め: 2024/3/19	-0.10	2025/7/31	現状維持
ユーロ圏	預金ファシリティレート	2.00	緩和: 2024/6/6	4.00	2025/7/24	現状維持
英国	バンク・レート	4.25	緩和: 2024/8/1	5.25	2025/6/19	現状維持
豪州	キャッシュ・レート	3.85	緩和: 2025/2/18	4.35	2025/7/8	現状維持
カナダ	翌日物金利	2.75	緩和: 2024/6/5	5.00	2025/7/30	現状維持
エマージングアジア						
中国	1年物最優遇貸出金利(LPR)	3.00	緩和: 2012/6/8	6.31	2025/7/21	現状維持
インド	翌日物レポ金利	5.50	緩和: 2025/2/7	6.50	2025/6/6	-50bp
インドネシア	BI金利	5.25	緩和: 2024/9/18	6.25	2025/7/16	-25bp
韓国	7日物レポ金利	2.50	緩和: 2024/10/11	3.50	2025/7/10	現状維持
マレーシア	翌日物金利	2.75	緩和: 2025/7/9	3.00	2025/7/9	-25bp
フィリピン	翌日物金利	5.25	緩和: 2024/8/15	6.50	2026/6/19	-25bp
台湾	再割引金利(公定歩合)	2.000	引き締め: 2022/3/17	1.125	2024/12/19	現状維持
タイ	翌日物レポ金利	1.75	緩和: 2024/10/16	2.50	2025/6/25	現状維持
ベトナム	リファイナンス金利	5.00	緩和: 2023/3/31	6.00	2023/5/23	-50bp

(注) インドネシア中銀は2023年12月21日に政策金利を7日物リバースレポレートからBI金利に変更

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行